

# 「男性学」と「進化心理学」

—「男性学」に「進化心理学」的発想を導入する際の覚書—

● 藤 崎 康 彦

## 一、「男性学」は社会構築主義的な見方が基本である

「男同士の絆」については女性学の観点からも、男自身の自覚からも（「男性学」の観点からも）その存在について指摘されている<sup>(i)</sup>。前者における代表的な論者のセジウィックの著書（2001）からこの観念が広く知られるようになったとも言えるだろう。彼女は文芸評論の研究者であるとはいえ、構築主義的な立場で男同士の「ホモソーシャル」な関係を明らかにした。ヘテロセクシュアルな男女関係（結婚）を媒介にして男たちは「ホモソーシャル」な関係を互に取り結ぶのだが、そこからホモフォビア（男性の同性愛嫌悪）、ミソジニー（女性嫌悪、女ぎらい）が一連のものとして成立する論理を鮮やかに示した。この（ホモセクシュアルと区別する概念としての）「ホモソーシャル」という概念がフェミニストに与えたインパクトは相当なものであったらしい。

女性学／ジェンダー論が盛んになりつつある時期に、男同士の結びつき、集団形成を進化における適応の結果として説明する立場も現れた（タイガー1976）。ジェンダー論が誤りとする本質主義的な立場からの議論のようにみえて、批判を浴びたようだ（Tiger2005）。狩猟によって生存をはかっていた（定着農耕以前の）時代においては、男同士の団結が、食糧確保の点でも外敵への対応の点でも生存＝環境への適応に有利であったからこそ、ヒトの基本的性質として進化的に獲得されたとみる。その立場から現代においてもいかに男同士の様々な「結社」が機能しているかを多くの民族誌などを例に示している<sup>(ii)</sup>。しかしセジウィックの指摘する「男同士の絆」に必然的に伴うと思われる（女の立場からは負の性質である）ミソジニーや、特に近代において存在していると思われる強い感情であるホモフォビアについては特に触れてはいない。

男について論じる時には相対的に女を無視して独立に論じる立場もあるし、実際にそうすることもある程度はできる。大人への通過儀礼あるいはイニシエーション（成熟儀礼、加入礼）は現実には男が男に対して行う例が多く、筆者も日本の民俗における通過儀礼の分析を民俗映像に基づき、文献資料も参照して行った。それらは実際には「男が男を産む」、「男が男を育てる」などとして、（ムラの運営を担う集団としての）男同士の結びつきの形成、あるいは男の集団への加入の儀礼として論じた（藤崎2009、2010）。

男のイニシエーションを論じる時には、女のあり方には触れないで済ますことも、別の成熟儀礼／イニシエーションのあり方が女にはあるのだとして、男女のあり方を（それぞれ）別のものとして論じることもあり得るだろう。たとえば女性には身体的に明瞭な成熟の徴候が現れるから、それをもって「自然」な成熟と見なすことが容易であり、現に多くの社会ではそのようにしている。これに対して男性には授精が可能になった徴候として「精通」はあるが、そういう「自然」的現象を男としての成熟の徴として何らかの（家族内であれ、地縁や血縁の共同体レベルであれ）社会的儀礼を行っているところは、管見の及ぶところないようである。むしろそういう自然的徴候に基づくものとは別の、何らかの「文化」的儀礼を経験させて、一人前の男と認める傾向が強い。同じ（生殖が可能になったという）生物学的な意味を持つ現象でも男性と女性では文化的意味については異なった扱いをされているようだ。だからこそ「男が文化で、女は自然か（男と女

の関係は文化と自然の関係に相当するか)」というフェミニストの問いも出てくる（アードナー他1987）。

しかし男性と女性が揃わなければ次世代の成員も生まれぬ以上、男と女のあり方あるいは関係性も「男性学」のテーマの一つとして当然含まれよう。しかし、現在の「男性学」では（フェミニズムのインパクトから、男性の自己覚醒あるいは自己啓発運動や「男性解放」の社会運動などとして始まって、次第に学問化されてきた経緯があるために）男性と女性との支配—服従関係、あるいは「男性社会」といわれる家父長支配的な制度の脈絡で、男と女のあり方も議論される傾向がある。たとえばDVやセクハラ、ひいてはレイプなどに表現される女性への暴力的な支配について、「社会問題」の一つとしての「男性問題」として「構築」し議論する傾向がある。その他にも家事・育児への参加、あるいはそれらが不可能であるような過剰労働、ひいては過労死なども男女が共に家庭や社会で過ごす上での家父長的な男性社会の「問題」とされる。

この男女の関係性を考える時、たとえば何も「自然」的なものではなく、自覚と努力でどのようにでも変えてゆくことができるという立場も考えられる。たとえば「女らしさ」はそれを根拠づけるような「自然」的なものではなく、すべて「社会的に構築された」ものであるという見方がそうである。当然それは「男らしさ」にも当てはまり、「鎧」として身にまとった「男らしさ」に男たちが自らがなじがらめになっているからこそ「男性問題」（のいくつか）は生じる、とこの立場からは考えることができる。

このような立場は、性的な（つまり生殖に関する）機能以外、男女に本質的な差などは全くなく、それらによって社会的・政治的に何らかの差別的待遇がなされるべきではないという主張につながる。この主張の後半は間違いなく政治的に正しい。これは既に確立した認識と（少なくとも公的には）なっているだろう。

しかし、先ほど指摘した、身体的・性的成熟の評価の仕方が（ほとんど普遍的に）男女で異なるようだという点にも関係するが、「性的な機能以外男女の差はない」という部分はどうか。むしろ性的な差が男女において何らかの差を生み出していることは確かであり、その評価のあり方こそが問題になるのではないだろうか。

これから「男性学」の領域において、現在の基本となっている「社会構築主義」的見方だけではなく、進化的な生物学の一領域である「進化心理学」的な発想を導入するとどのような議論が可能となるか、考えてみたい。まず男女の関係性に関して俗耳に入りやすい、しかしそれ故に影響力を持ちやすい言説を代表例としていくつか取り上げ、覚書的にまた批判的に考えをまとめてみたい。

## 二、「男性」の生物学

生物学的にみた場合、男性は「遺伝子の運び屋」（福岡2008）である、という見方がある<sup>(iii)</sup>。生物としては他には特段の機能がなく、だからこそ男は団結して、様々な社会、文化的な機能を自らの本質であるかのごとくに引き受けて、「男らしさ」を演じてきたと考えることができる。その団結や絆の形成に役立つのが、様々な通過儀礼であるという見方を、先に述べた筆者の議論は示しているということができる。換言すれば、男性は「遺伝子の運び手」であり、それが「男性」の（生物学的）本質であり、「男」としての（社会・文化的）本質は後から作り上げたものだとみている。

これらの筆者なりの論理には、いくつかの隠された前提や、敢えて無視している事柄がある。それは、では女性はどうなのかと問う時に明らかになる。「遺伝子の運び手」という時、それは

女性に対しての話であることは明らかだ。今相対している男性・女性の間で見れば男性は「運び手」で、女性は「受け手」ということになる。

しかし、世代を超えて考えてみれば、子孫を残すという行為を通じて、男性も女性も次の世代への遺伝子の運び屋あるいは「伝え手」に過ぎないということができる。これが生物学（以前の社会生物学、現在の進化心理学）の基本的見方である。個人の資質の淘汰による進化は、子孫を残すか残さないかで決まるからである。

また、男性だけを「遺伝子の運び手」とすることは、暗黙のうちに女性に対しては「本質主義的」見方をしていると批判される可能性がある。あたかも子を産み育てることが（生物としての）女性という存在の「本質」で、それによって（男性の空虚に対して）女性が存在として「本質的に充足されている」と主張しているかのような印象を与えるかも知れない。これと表裏一体で、男性については、生物としての空虚を一挙に「男」として文化（何らかの価値観、イデオロギー）で埋めるかのような論理に筆者の場合はなっているともみえる。ここには論理の飛躍があるといわれても仕方がない。

さらに、文化相対主義の立場に立っても、男たちの行動には通文化的な普遍性（少なくとも繰り返し現れる共通性）が認められる。たとえば「男同士の絆」（男同士の結託、集団形成）が何らかのレベルと規模でどの文化にも観察できる（タイガー前掲書、セジウィック前掲書）。ついでにいえば、多少なりとも「女ぎらい」の傾向も認められる（Gilmore2001）。逆に女たちにも（子を産むという一点を除けば）様々なあり方（価値観）が観察できるといえるだろう。

これは男性と女性について比較対照のレベルが異なっていることが原因だ。同じ生物学的レベルでも通時的なレベルと、共時的なレベルを分けて、それぞれにおける男性、女性のあり方を考えなければならない。今回はそのねじれを修正して、子孫を残す機能を中心に、両者とも生物学的な通時的レベルで先ず考えてみる。

### 三、生物学的視点から見た男性と女性

生物のレベルで言えば、子孫を残すことに関する男性、女性それぞれの「資源（時間とエネルギー）」の投入量が違うことは明らかだ。それが先の「遺伝子の運び手」論につながるのだろう。繁殖に投入する資源量の違いは哺乳動物全般に通じる特徴だが、ヒトの場合特に直立二足歩行によって、出産前後の母親の負担が増えたことは確かである。その上で自己の遺伝子を受け継いでいる子を持つことについて考える際の前提を確認しておこう。

#### 基本的な概念

①利己的な遺伝子：われわれは遺伝子（DNA）の「乗り物」であって、その遺伝子は、次世代に確実に（できるだけ沢山）自己を複製できるように、「乗り物」（としての個々の男性、女性）を操っている（ドーキンス1991）。

②淘汰のかかる対象：群ではなく、個体の適応を最大にするよう淘汰はかかる。適応とは子孫を残す「繁殖」に成功することである。その個体の子孫が多ければ多いほど適応したことになる。

③性淘汰：ヒトも含めて哺乳類（鳥類などのその他のかなりの脊椎動物も）は雄と雌の体型あるいは外観が顕著に異なるものがある。これを性的二型と言う。しばしばクジャクの雄の羽根が例に挙げられる。なぜそのように雄と雌の性の大きな違いができてきたかは、それぞれの性の繁

殖の特徴に応じて、かかる淘汰のあり方が違うからである。端的に言えば子孫を残すための負担（投資量、コスト）が異なるから、異なる進化を（しかし相互に関連しながら）遂げたのである。

このような諸前提を元にすれば、ヒトについては、生殖行為に関する雄（男性）の負担は他の哺乳類の雄並みに小さい。雌（女性）は遙かに負担が大きい。それに依拠して「繁殖戦略」（端的に言えば性交の相手の確保）も異なってきていると進化生物学者たちは主張する。負担の増大によって、哺乳類の雌、鳥類のかなりの種類の雌は慎重に雄を選ばなければならない。生き残る可能性の少ない劣等な遺伝子を持つ雄を配偶相手に選ぶことはその雌の適応度を損なう。この事態を簡潔に表現すれば男性の「色好み」に対して女性の「選り好み」がそれぞれの性戦略になる（ソーンヒル他2006）。

この認識を反映したような（というより正しくは反映していない）「ポピュラー・サイエンス」風の言説がかなり流布していて、例えばNHKで放映された『NHKスペシャル「女と男」最新科学が読み解く性』というプログラム（DVD版2009、および対応する解説本はNHKスペシャル取材班2009）にも進化心理学的な解説や、そういう観点からの説明をする研究者の話が（権威付けと共に）少なからず出てきている。半端な進化心理学的な説明だと、男性のあり方も、かつ男女の関係性も誤解しかねない（というよりトンデモ本のたぐいの話になる）。そのような部分を例として二つほど挙げてみる。

### （1）精子競争とヒトの精子の劣化

これからのトピックは、元々は男性の性染色体であるY染色体が、世代を経るたびに次第に損傷して対応するX染色体に比べて短くなっていて、いずれ（一説には600万年後位には、あるいは他の説として15万から長くても20万年後には（サイクス2004））無くなってしまふ、従って男性もいなくなる（そうなれば「男性学」も必要なくなる！）というセンセーショナルな話に関連して出てくる。Y遺伝子がいずれ無くなるかは筆者には判らないが、生殖細胞の分裂の時に対になっている染色体の融合と再分裂は、対になる相手のないY遺伝子については生じないことは確かである。問題はY遺伝子だけではなく、精子の劣化一般の話になったときである。Y遺伝子の劣化は精子全体の劣化に関係があるとサイクスは前掲書でいう。ヒトの精子は劣化していて、自然に任せていては妊娠しにくい状態になっているというのである。だからこそ各種の生殖医療が必要とされているとして、その話題もDVDの中では紹介されている。そしてなぜヒトの精子は劣化するかの説明が次のように述べられている。

ヒト（デンマーク、フィンランド、イギリス、フランスなどの北ないし西欧人、また日本人も対照として調査されたようだ）とチンパンジーの精子を比較すると、ヒトの（老人ではなく）二十代の若者でも精子の劣化は激しく、奇形、運動性低下、数の減少などが観察される。これに対してチンパンジーの（おそらくヒトの若者に対応する若い個体のものと想像するが、特に説明はなされていない）精子は顕微鏡下で観察した映像では、人と対照的に多数の精虫が活発に動き回っているのが分かる。

DVDでは（そしてNHKスペシャル取材班前掲書でも）「乱婚」が基本のチンパンジーは、雌は発情期に多くの雄と性交を行うために、子宮内で「精子競争」が起こり、勢いの良い「元気な精子」（同書：203）が勝ち残る、と説明する。つまりその精子にある遺伝子が次世代に伝えられることになる。これに対して、ヒトの場合、乱婚ではないので精子の質は悪くとも淘汰されずに子孫が残ったという。チンパンジーとヒトを対比して、論理を逆にして推論すると「子宮内の精

子競争がないのは雌が複数の雄と結ばれないからだ。つまり人間は乱婚を排除し、一夫一妻を基本としているから、精子の質が悪いのである（同書同箇所）」という。しかしこれは誰が主張しているのか DVD でも本でも説明はない。

さすがにこんな話は誰も真に受けてはいないと思われるが、「男性学」を担当している筆者は一言コメントを付さねばならない気持ちになる。敢えて説明する必要もないくらいだが、チンパンジーには（ニホンザルにも）「発情期」がある。受胎可能の時期である印を臀部の皮の肥厚（色も変わる）などで示しているのである。これに対してヒトは「発情期」（の明瞭な印）を隠蔽している動物なのである。チンパンジーの雌たちは発情期以外は性交をさせない。これに対して、ヒトの場合、明瞭な発情期を表現しないと同時に、特に時期を限定せず性行為を行う（ことのできる）特異な（ユニークな）動物なのである。それ故に pansexual（汎性的）な動物といわれる。

なぜそうかは別に進化心理学的説明があって、発情期を無くし（あるいは生殖可能年齢の間はほとんどいつでも発情中で？）随時性交が可能になっていることが、ヒトの進化に適応的であったということである。先に触れたように、ヒトの子どもは発育に手間がかかる。親が手をあまりかけずに、子どもが一人で活動できるようになるまでには（文化によって必要とされるレベルが違うだろうが）最低四年はかかる。母親の立場ではその間パートナー（父親）をつなぎ止めて子育てに役立つ資源（食料や外敵からの保護）を引き出す必要がある。それには性交を男性に対するいわば報償として与えておくことが有効であり有利であったという論理である。この論理の可否は筆者には判断できないが<sup>(iv)</sup>、確かにパートナーとの関係を維持することは男性の側にも自分の遺伝子を残す為に必要であり、それに対応した適応的な行動が発達していると見ることもできるかも知れない。それは、たとえば次のようなことだ。

ヒトにもチンパンジーやサルとは異なる意味での「精子競争」があるという指摘がある。ある条件ではヒトの精子は「濃く」なり、パートナーの受胎の可能性が増すように（当の男性は知るべくもないことだが）仕組まれているのだそう（ソーンヒル他2006）。それはパートナーと離れている時間に規定されるらしい。男性がパートナーと長く離れていれば、その間パートナーである女性が姦通をする恐れはある。精子の濃度を増すのは、そういう場合に対抗する適応的な行動だということだ。

つまり、女性（母親）だけでなく男性（父親）も父性の確実性を高める行動を（意識的、無意識的に）取る。パートナーに産ませた子が確実に生き延びるように母親と協力する。性交はもちろん協力へのインセンティブになるだろう。しかし、文化の中にはそういう「報償」を父親は敢えて断念して、子よりよい生育に配慮するような価値観を持つ文化すらもある<sup>(v)</sup>。

つまりヒトの場合、決まったパートナーと（一人の男性と複数の女性とであっても、それぞれのパートナー関係としては安定している）ある程度の期間は安定した関係を築くことが普遍的に観察できる性質である。そういうものとして進化してきたのである以上、チンパンジーやサルと同じ「精子競争」が無いから精子が劣化するという理屈は通りにくい。

ただし、一部の国あるいは民族の男性で、精子が劣化していることは事実だろう。しかし、化学物質など体内にはいるとホルモン様の働きをする物質で環境が汚染されていることが原因（の一つ）だという説（キャドバリー1997、コルボーン他1997）もある以上、それはより広範な調査をしなければならない事柄である。現在のところは、データが得られている地域は、いわゆる高度に発達した産業社会だけであるようだ。これを相対的に汚染から免れている地域の住民のデータと比較して初めて、ヒトのすなわち「人類」全体の精子が劣化しているのか（この場合はサイクスの見方が妥当性を持つかも知れない）、一部の（特定の地域の）集団の精子が劣化している

だけなのかの判断が付くであろう。

## (2) 恋の賞味期限

先の『NHK スペシャル「女と男」』のプログラムには、他にも誤解を招きそうな映像が含まれている。その一つが、男女の「恋の賞味期限」の話である。男女が恋愛をしている時の脳内の生化学的状態の観察映像などの興味深い資料に交ざって、その恋は早くて十八ヶ月、遅くて四年度で冷めてしまうという説（フィッシャー1993）が紹介されている。それは、先にも触れたように、子が一人で活動できる時期と一致している。DVDに収録されている映像の説明では男はその子が確実に育つ見通し（幼児は三歳くらいまでは脆弱で、どこの文化でも他の年齢層と比べて死亡率が極めて高いのは確かであると思われる）がついたところで他のパートナーを求めて去っていくのが男性の性質だということだ。つまり、雄としては精子をできるだけ拡散した方が繁殖の適応度が増す（と自覚せずとも考えている）という理屈である。同じ雌とだけ遺伝子を混合するより、他の雌の遺伝子と混合した方が、遺伝子の多様性が確保され、自分の遺伝子を持つ個体のどれかは生存する確率が高くなると想定するのである。

しかしこれも進化心理学の範囲であっても偏った理屈であるようだ。先に触れた様に、ヒトの男性と女性は子孫を残すための負担（投資量、コスト）が異なる故に、それぞれ幾分異なる「性戦略」を発達させてきたという。先ず二つの性戦略のパタンを紹介しよう（坂口2009）。それぞれ短期戦略と長期戦略と名付ける。それらは男性と女性とではそれぞれの重点が異なる。男性の短期戦略とは性的に手に入りやすい女性を素早く見つけ、責任ある関わり（コミットメント）を最小にしながら子を持つことであり、かつそれを（次々）多数のパートナーに適用することである。長期戦略とは確実に自分の子を良い遺伝子を持つパートナーが産むように関わりを増やし、その子を父として保護し続けることである。広く数多く子を持つか、手元に確実に子を確保するか戦略の違いといってもよいかもしれない。

女性にとってはニュアンスが少し異なり、短期戦略とは先ず相手が今すぐに、より多く自分に投資してくれること、身体の頑健さや容姿の良さなど遺伝子の質の良さを表現していると思われる異性をパートナーにすることに重点がある。その中から長期的な関わりを持つのに相応しい相手を選ぶことも次の段階としてはある。長期戦略としては先ず自分と将来の子どもに対して十分な投資をする能力と意思があるかを見極めに重点が置かれる。保護と責任ある関わりを与えてくれる男性がパートナー選びの候補となる。もちろんその上で遺伝子の質の良さも考慮する。女性にとってのパートナーはいわば「良い遺伝子男」と「良い父親男」に分けられることになる（坂口前掲書）。短期戦略では「良い遺伝子男」が、長期戦略では「良い父親男」がパートナーの候補選びの際の重点的対象となる。

もちろん二つの戦略は相互に排除し合い両立ができないというものではない。性格や女性の年齢やおかれている環境などによって異なる戦略が採られるのであろう。まずは短期戦略で、次は長期戦略でということもあろう。しかし、ニュアンスとして女性は最終的には長期戦略に重点を置くという印象は、どうしても受けてしまうだろう。

先の「恋の賞味期限」の話は男性の話だが、男性は本質的に短期戦略が基本という前提で説明が組み立てられていることは明かだろう。何しろ「遺伝子の運び手」なのであるから、多くの相手に届けることはその本質に矛盾した行為ではない。しかし、現実には人類社会の多くでは長期的な安定したパートナー関係が形成され、男性はパートナーと子を保護する「良い父親男」がやはり多数派である。恐らく長期戦略を採用した方が子の生存の可能性が高く、結果的に適応が良くなるからであろうと思われる。たとえば次のような状況を考えればよい。

安易に他の種の霊長類と比較することは、先の「精子戦争」の話と同様な過ちを犯す可能性があるが、一つの比喩的な話として考えてみる。ある種の霊長類は、ボスが群れの雌全てと交尾し、子孫を残すような行動を取る。他の雄がボスを倒し、群れを乗っ取った場合には新しいボスは授乳中の雌の子を全て殺す。子を殺された雌は間もなく発情し新しいボスと交尾しその子を産む(杉山1993)。つまり、この霊長類は「自分の」遺伝子を確実に残す行動を発達させているのである。

ここから、人間の場合の起こりうる事態に連想が働くだろう。幼児や児童の虐待や育児放棄などで幼い命を奪われる例がメディアで少なからず報道されている。その中には、パートナーと別れて新しいパートナーと暮らす女性が前のパートナーとの間にもうけた子が、新しいパートナー(男性)によって虐待される例が含まれている。先のヒトの繁殖戦略からしたら、自分の遺伝子を受け継いでいない子に投資させられる事態は避けようとするのが生物としては自然なようである。そういうことが(当人は自覚していなくとも)生じているのかも知れない。

そこまでいかなくとも、次のような事態は容易に考えられる。まだ生殖能力を持っている女性のもとを去り、新しいパートナーを求めて男性がいなくなったとしよう。別の男性が同じように新しい女性を求めて、この女性のところに来たとする。新しい男性との間に子を産むことは女性には可能だが、その男性は女性の前のパートナーの子を保護してくれるだろうか。仮に二番目の男性が長期戦略を採る人であった場合、前の男性の子は保護せず、自分が生ませた二人以上の子を確実に保護した方が、適応度は高くなる。つまり短期的戦略を採り、あちこちに「種付け」だけをして去っていった男性は、結果的に自分の遺伝子を持つ子を全て失い、適応度が下がる可能性は高い。

確かに「恋」は冷めるのであろう。しかし今度は「愛着」が男女の絆を保つのである。あるいは男女それぞれの、子に対する愛着が、男女の互いの関係を維持する役に立っているといっているかも知れない。「子は鎧」とはこの事態を指していることわざだろう。男女の間には「愛情」しかないと思いきむのは西欧近代に成立した近代家族的イデオロギー(ショーター1987)のいきすぎた錯覚だろう。

#### 四、進化心理学を男性学に生かす際の留意点とアイデア

##### (1) 個体レベルの論理

多くの動物種は個体＝種(雌雄は別にして、他はどの個体をとっても種としての性質をすべて具備していて、互いに差はない)であるが、ヒトの場合、「中間社会」というべき、(核家族から大家族、複合的な所帯に至るまでの)家族、一族、地域集団に属して生存していることは基本的条件として無視はできない。ヒトはその中間社会の中で独自の言語を話し、他と異なる価値や慣習を持つ。つまりそれぞれの文化を持つ。(従って民族集団などは互いに異なる「種」に属しているかのように感じて対立することは稀ではない。)しかし、進化心理学的な見方に立つ研究者の多くは動物の研究を基本にしてヒトを考えている。そのため、どうしても個人(個体)のレベルの環境(もちろんこの中には社会制度も個人を取り巻く環境に含まれるというのであろうが、それにしても彼らが個人の社会「行動」ではなく社会「制度」まで踏み込んで議論していることは少ないように思う)への適応行動と淘汰を考える傾向がある。

しかし、生物学的存在としてのヒトから社会的存在としての「人」に視点を移した場合、集団と他の集団間との女性のやり取りとして婚姻関係が形成されていることは人類学の基本的見方であり、むしろそのようなあり方の方が人類の歴史において基本(生存のモードとしていわば初期

設定)であった。つまり「乱婚状態」などは存在しなかったのである。

婚資が夫方集団から妻方集団に贈られることで成立するような、たとえばアフリカの諸部族の婚姻では、子孫を残すための制度として婚姻(配偶関係の成立)を見なすことが基本になろう。北アメリカ先住民の、大平原にバッファローを追う狩猟生活をしていたいくつかの部族では、若い男女の交際は(節度は要求されるが、相手の選択は)自主性に任され(もちろんその社会の親族構造が許容するカテゴリーの範囲内で)、互いに選んだ相手を社会的に承認する仕組みで行われる。その場合、ことに女性の場合、良い狩人でありかつ良い戦士である男性が最良の配偶者と見なされる(藤崎2011)。これはいわば坂口の言う「良い遺伝子男」と「良い父親男」の区別を付けることがあまり意味をなさない例かも知れない。

これに対しては異なる見方もできよう。つまり、むしろ「良い遺伝子」男の方を社会的に評価して最善の配偶者と見なすようにしている文化だともいえるかも知れない。「良い遺伝子」男はしばしば恐れを知らぬ戦士であり、危険を冒して獲物を倒す猟師であるから、早死にする可能性は高い。それでも集団として存続が可能であったのは、残された子の母や父の一族が、残された子が新たに(社会成員の一人としての)一人前の男や女になるまでの資源を供給してくれるからである。社会的・自然的な環境圧力(近隣の敵対部族との絶え間ない戦闘や、基本的生活資源をバッファローの狩猟に依存していること—バッファローは衣食住のすべてにわたって不可欠な資源である—などが明らかに大きい条件である)に適応するために、可能な「配偶戦略」のうちの一つを優越させたのであるという説明は、このような社会については可能かも知れない。

しかしながら、ここでは明らかに生物としての配偶戦略に文化的な価値が介入していることが重要である。裸の個体(個人)としての男性と女性がパートナー選びの駆け引きをしているわけではない。むしろ大きな集団の意志に(それと自覚せずとも)従うことで、配偶者を得ていた期間が(人類の歴史においては)長かったのであろうと思う。

## (2) 個人を(社会的価値より)優先する時代なりの問題点

これまでの進化心理学的な話は、すべて個人はそれぞれ「利己的な遺伝子」の乗り物であり、遺伝子を次代にできるだけ多く残すように(多くの子孫を持つように)操られている(自覚せずとも「恋すること」などを通じてそのように行動している)という論理で議論されてきた。先に見たように、文化を持ち何らかの中間集団に属して生きる人類は、このような個人レベルでの議論では説明に無理が生じる場合もあると論じた。しかし現代は個人中心の社会になったことでまさに進化心理学的な説明は説得力を増しているとみることがもできる。またしかし、避妊の方法の発達により性と生殖がほぼ完全に分離したことによって、現代においては別の大きな変化が起きているとみることがもできるかも知れない。そしてそれは、進化心理学の説得力を減殺するものである可能性も考えられる。

かつては結婚すれば子供を持つことになるもの、あるいは(家の跡継ぎなどを得るという理由で、あるいはかわいいから欲しいという理由で、など動機はどうあれ)子を得るために結婚するものであることなどは「常識」として受け入れられていた。しかしながら現代はそもそも子を持つとうとしない夫婦も増えている。子を持たない夫婦は都市においてはかつても存在したであろう。それでも人口学や社会学の研究者の指摘するように、子を持つ夫婦は、二人以上子を産んでいたのである。しかし合計特殊出生率が現在の日本のように1.26(2005年)からせいぜい1.37(2009年)という数字になると、(男女双方の生涯未婚率の増大は別に)子を持たない夫婦と共に子を持つても一人にとどめておく夫婦も増えているのではないかと思われてくる。身近にも一人

っ子は増えている印象を受ける。

子の数を最小限にとどめておく理由は、ある程度想像はできる。子を一人前にするために投入すべき資源が（特に教育の脈絡で）大きくなりすぎたのに対し、親の経済的な資源（子は親の老後の保障にはならないことが現代においては明らかである以上、自分たちの老後のためにも一定の資源は留保しておかなくてはならない）はかつて（右肩上がりの収入増を期待できた高度経済成長期など）と比べてさほど大きくなっていない。確実に遺伝子を残す戦略として少ない（たった一人！）の子を大事に育てる戦略は（孫の世代で増えるかも知れない期待はもてるから）、進化心理学的に考えても、こういう時代のそれなりの適応行動であるということが出来るかも知れない。

しかし、子を持たない理由は、明快には説明できないのではないだろうか。進化心理学も、繁殖をしない個体については論じるのが難しいのではなからうか。現在のところ全くの推測にとどまるが、今後考えなくてはならない論点として次のような点が挙げられる。

（１）子供ぎらいの、あるいは子供を忌避する個人が増えてきた。この理由は養育の負担を負いたくないとか、本当に子供という存在が好きではないということがあるのかも知れない。時間や収入などの資源は自分にのみ振り向けたいという個人はいてもおかしくはない。

（２）社会全体が子供ぎらいになっている。あるいは子を持つのは当然という規範（あるいは思い込み）がなくなっている（本田2007）。

（３）そもそも結婚しても（避妊のためというのではなく）、性行為自体をしなくなった面もあるのかも知れない（阿部2004）。

（４）持ちたいのだが、（結婚が遅くなって）受胎の適期を過ぎたか、男性の精子が劣化しているか、その他の何らかの理由で受胎できずあきらめた。

これらは、項目としては別に立てたが、皆何らかの形で関係している可能性は大いにある。特に（１）と（２）は同じことの両面であるように思う。産んでも育児放棄などで消極的に、あるいは虐待などで積極的に、実の親の場合でも子の命を奪っている例が少なからず生じているように感じることも、ここに結びつくだろう。

つまり遺伝子を次世代に伝える運び手としての役割を男性も女性も忌避する傾向があるとしたら、進化心理学はどのように理論化するのであろうか。世界の人口自体は増えている。つまりホモサピエンス自体は十分に繁栄しているとすれば、一部の社会の人口減少や、「子どもを忌避する」傾向は動物種ではなく、品種に相当する（文化集団などの）下位区分の個体の現象だから、特に異とするに足らないともいえる。しかし、淘汰は集団ではなく、個体にかかるはずである。自己の持つ遺伝子を拡散しようとしたくない個体が多くなることはどう考えたらいいのであろうか。

## おわりに

男の性質の重要な部分であると思われる「ミソジニー」は、その現象は多くの人が指摘している（スミス1991、上野2010、MacKinnon1990）のだが、なぜミソジニーがあるのかの理由については仮説的な理論の整理以上（Gilmore2001）には、例外的なものを除き（セジウィック前掲書、内田2003）あまり追求されていない。それが形成される理由について、ここでみてきた進化心理学的なアプローチはヒントを与えてくれるのではないかと思う。先の性戦略の男女の違いは何らかの影響を男に及ぼすような気がするのであるが、筆者には十分展開する準備ができていない。今後の課題としたい。

## 参考文献

- 阿部輝夫 2004 『セックスレスの精神医学』 筑摩書房 (ちくま新書)
- アードナー、エドウィン他著 1987 『男が文化で、女は自然か?』 晶文社
- キャドバリー、デボラ 1997 『メス化する自然』 集英社
- コルボーン、シーア他著 1997 『奪われし未来』 翔泳社
- ダブス、ジェイムス・M. 他著 2001 『テストステロン—愛と暴力のホルモン』 青土社
- フィッシャー、H. 1993 『愛はなぜ終わるのか』 草思社
- 藤崎康彦 2007 「ナバホ創世神話の中のナドレー宇宙観とジェンダー研究序説」『跡見学園女子大学紀要 第四十号』
- 2009 「男が男を生む—イニシエーションとジェンダーの研究—」『人文学フォーラム 第7号』
- 2010 「栃木県川俣の元服式の意味—「若衆組」とイニシエーションの観点から」『コミュニケーション文化 第4号』
- 2011 (刊行予定) 「「平原インディアン」のベルダーシュの一考察—シャイアン族の「半男—半女」について—」『跡見学園女子大学文学部紀要 第四十六号』
- 福岡伸一 2008 『できそこないの男たち』 光文社新書
- Gilmore, D. D., 2001, *Misogyny: The Male Malady*, University of Pennsylvania Press.
- 本田和子 2007 『子どもが忌避される時代—なぜ子どもは生まれにくくなったのか』 新曜社
- ジョーンズ、スティーヴ 2004 『Yの真実』 化学同人
- MacKinnon, K., 1990, *Misogyny in the Movies*, Associated University Press.
- NHK スペシャル取材班 2009a 『だから、男と女はすれ違う』 ダイアモンド社
- 2009b 『女と男 最新科学が読み解く性 (DVD 全三巻)』 NHK エンタープライズ
- ロビンス、アレクサンドラ 2004 『スカル&ボーンズ』 成甲書房
- 坂口菊恵 2009 『ナンパを科学する—ヒトのふたつの性戦略』 東京書籍
- セジウィック、イヴ・K 2001 『男同士の絆』 名古屋大学出版会
- ショーター、エドワード 1987 『近代家族の形成』 昭和堂
- スミス、ジョン 1991 『男はみんな女が嫌い』 筑摩書房
- 杉山幸丸 1993 『子殺しの行動学』 講談社学術文庫
- サイクス、ブライアン 2004 『アダムの呪い』 ソニー・マガジズ
- ソーンヒル、R. G. パーマー 2006 『人はなぜレイプするのか—進化生物学が解き明かす』 青灯社
- タイガー、L. 1976 『男性社会』 創元社
- Tiger, Lionel. 2005, *Men in Groups. With a new introduction by the author*, Transaction Publishers.
- 内田 樹 2003 「アメリカン・ミソジニー」『映画の構造分析』晶文社 所収
- 上野千鶴子 2010 『女ぎらい』 紀伊國屋書店

---

(i) 論述の都合上、先ず用語を定義しておきたい。少なくとも以下の説明では、生物としての雄を「男性」、文化的・社会的存在としては「男」として一貫させた。生物学的な意味 (sex) と社会・文化的な意味 (gender) を区別しておく必要が今回の議論にはあるからである。ただ、セックスとジェンダーが概念的に区別できるかという疑問は女性学/ジェンダー論の側にもある。(たとえば「間性 (intersex)」の人たちを男性、女性いずれかの性別として「戸籍登録」すること自体、文化的 (あるいは政治的) 振り分けであると理解することができる。この場合その子の登録されたセックスは文化・社会的なジェンダーとみなさざるを得ない。) 本稿の議論もそこに関係するであろう以上、あくまで暫定的な区別である。しかし既存の用語が筆者のこれらの用語と齟齬を来すことがある。たとえば「男性学」や「男らしさ」のような例であ

る。「男性学」といっても生物としての男性の研究を主として行っているわけではない。まさに社会的存在としての（筆者の用語法でいえば）「男」の研究をしているのである。だからこそ「男らしさ」が大きな課題になるのである。しかしながら、その「男らしさ」の中にも「男性ホルモン」で支配されているような行動（ダブス他2001）や（身体の）表現型（たとえば髭の濃さなど）も含んでイメージされている場合も少なからずある。筆者の用語法にもかかわらず、慣用的に定まったもの、他の著者固有の用語法などは、必要に応じてカギ括弧に入れるなどして表示する。

- (ii) 人類学者だけではなく、ジャーナリストもたとえば欧米の大学での男子結社である「フラターニティ」を調査して報告している。イエール大学の、ブッシュ大統領父子も属したクラブについてロビンス（2004）が書いている。
- (iii) 福岡2008が興味深い物語として読めるが、簡にして要を得た表現は同じ福岡が翻訳したジョーンズ2004の「訳者あとがき」にある。彼は「この世の中には、なぜ二つの性が存在しているのだろうか。生物学的にみれば、その答えは極めて明白かつシンプルである。女性たちが自らの遺伝子情報を交換するために、その橋渡し役として男性を作り出したのである。つまり女性こそが生物本来の性であり、男性は単なる使い走りではない。」と p. 320で述べている。
- (iv) しかし、この論理をそのまま表現したような神話が北アメリカ先住民にある。セックス目当てに男は狩りをしているのだという女のあからさまな態度に怒った男たちは、女たちと分かれて男たち（とベルダーシュと普通いわれている「男でもない、女でもない」人たちと）だけで暮らし始める。もちろん最後は和解して再び共に暮らすようにはなるのであるが。（藤崎2007参照。）
- (v) 北米先住民のシャイアン族にはこういう慣習が報告されている。子の誕生後も男（父親）の影響は続くと考えているようで、有限なエネルギーをその子のために注ぐかのように、一種のセリバシー（禁欲、性の節制）を行う。藤崎2011（刊行予定）参照。